

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT



7 3
6742



蘭山高井先生著

御成敗式目證註

東京書肆

玉巖堂

御成敗式目證註自叙

凡官士を主小仕て政治成補農民の食と休り出て
貴賤を差ひ工匠の宮殿城郭を主第屋達等々で
造り出て人居とありしめ高賈る交易を主
朝暮の國用迄を辨じかく億兆の人種上小明王
出で天地の参王を爲の化育と施し衆と治賊と禁
衆を以て安堵を得孟子に云人成治る世ハ人小治る

而人と活る、唯壹よりて。成敗萬機、其精神必
 勞、ゆへに耕業の力と勞とに増進。往時平泰時
 同列小議して政務の振成宜む。是と以て太平殆ど保
 年厥后時と共小御変化あるて其目ハ替れども大綱を
 千萬年に易るる。於是禮注と述る兒童の伎と云

文政戊子丑分

高井 蘭山 蘭



御成敗式目

貞永元年正月十日

御成敗式目
 貞永元年八月十日



一可修理神

一可修理神社専系記事

此の目ハ鎌倉將軍藤原頼朝の御貞永元年八月十日
 北条氏親が平泰時を定むるよりその御成敗式目
 親清と立て政事を扱ひ、その泰時等の御成敗と
 是法度定むるより其の御成敗と面々
 さるる御成敗と云。成敗と云ふ好事と云ふ者ハ助け成
 せしめ悪とするは折て敗亡と云ふて便政事の事なり刑
 罰と云ふものと成敗と云ふものと其の御成敗の定むるを
 目と其の御成敗をいふ也

社專祭祀事

右神者依人之敬增威人者依神之德添運然則恒例之祭祀不致陵夷如在之禮莫莫令怠慢



因茲於關東御分國々並莊園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

天下の諸君は神祇を崇めずしては不可なり。神祇は天下の主宰なり。神祇の心を敬ふれば、神祇の力を得べし。神祇の力を得れば、天下の事を治めべし。神祇の力を得れば、天下の事を治めべし。神祇の力を得れば、天下の事を治めべし。

右神者依人之敬增威人者依神之德添運然則恒例之祭祀不致陵夷如在之禮莫莫令怠慢

恩顧を蒙りては外見を重んじず、内實を重んじ。人の信を以て敬ふ。敬ふれば、人の信を得べし。人の信を得れば、人の力を得べし。人の力を得れば、人の事を治めべし。人の事を治めべし。人の事を治めべし。

因茲於關東御分國々並莊園者地頭神主等各存其趣可致精誠也
又茲有封社之儀、代封

一可修造寺
塔勤行佛事
等事

[illegible]

右寺社は若くは宗教惟同仍
修造の例は勅令に準じ
條を招致勅令あり有べくは之を修造の
例に準じ定例の勅令も亦一々條の神社を修理
せしむるに依りて之を修造の勅令に準じ
修造の勅令に準じ之を修造の勅令に準じ
於不勅令に準じ之を修造の勅令に準じ
改易被職夫

諸國守護
人奉行事

右右大將家
御時所被定
置者大番催
促謀叛殺害
人並夜討強
盜山賊海賊
等事也



而近近年分
補代官於郡
鄉宛課公事
於庄保非國
司而妨國務
非地頭貪地
利所行之企
甚以無道也

其役を勤ふる傍わらふ事速行お
城を改め他の人易かりある事

一諸國守護人奉行事

鎌倉より法金小寺 中と守りわらふ事諸人といふ何
ひふより所を奉事せしめを奉事といふ事なり

右右大將家所内不被定
重なる事あ侍保謀殺殺害
人付夜討強盜海賊等事也

軍額御卿を 子内侍清人の奉事 鎌倉より法金小寺 中と守りわらふ事諸人といふ何
ひふより所を奉事せしめを奉事といふ事なり

而近近年分
補代官於郡
鄉宛課公事
於庄保非國
司而妨國務
非地頭貪地
利所行之企
甚以無道也

分補代官於郡鄉宛課公事
於庄保非國司而妨國務
非地頭貪地利所行之企
甚以無道也

代官を勤ふる傍わらふ事速行お
城を改め他の人易かりある事

抑雖為重代
御家人無當
時之所帶者
不能駢催兼
又所々下司
在官以下假
其名於御家
人對捍國司
領家下知云
如然之輩可
勤守護所役

之由縱雖望
申一切不可
加催



早任大將家
御時例大番
役並謀叛殺
害之外可令
停止守護之

御家人無當
時之所帶者
不能駢催兼
又所々下司
在官以下假
其名於御家
人對捍國司
領家下知云
如然之輩可
勤守護所役

抑雖為重代
御家人無當
時之所帶者
不能駢催兼
又所々下司
在官以下假
其名於御家
人對捍國司
領家下知云
如然之輩可
勤守護所役

早任大將家
御時例大番
役並謀叛殺
害之外可令
停止守護之

守護之法
件例の
大番の
役並謀叛殺
害之外可令
停止守護之

若背此式目
相交自餘事
者或依國司
領家之訴訟
或就地頭土
民之愁鬱非
法之至爲顯
然者被改所
帶之職可補
穩便之輩也

若肯以爲同

相吏内除事老或依國
司順教之所弘或執地以
去民之執樹對地法之至為
顯然志被改新常之職一
補秘授之軍也

法皇東幸の國司領地は百姓の手にありて上京
 せむ愁小堀の所松とて守護の能法然然とて

又至代官可
定一人也



一
同守護人

又五代官可定一人也

一
同守護人不申奉忠

不申事由没
收罪科跡事

右重犯之輩

出来時者須

申子細隨左

右之處不決

實否不輕

重悉稱罪科

之跡私令没

收之條理不

盡之沙汰甚

自由之奸謀

也早注進其

旨宜令蒙裁

斷猶以違犯

者可被死罪

科

次犯科人田

畠在家並妻

子資財事



收罪科跡事

はむ犯人の跡式を没收
するを禁むる事

右重犯之輩出来時須

申子細隨左

右之處不決

實否不輕

重悉稱罪科

之跡私令没

收之條理不

盡之沙汰甚

自由之奸謀

也早注進其

旨宜令蒙裁

斷猶以違犯

者可被死罪

科

次犯科人田

畠在家並妻

次犯科人田畠在家並妻
子資財事

以下ハ犯人の所
帯の物に付

於重科輩者
雖召渡守護
所到田宅妻
子雜具者不
及付渡兼又
同類事縱雖
載白狀無財
物者更非沙
汰之限

諸國地頭
令抑留年貢
所當事
右抑留年貢
之由有本所
之訴訟者即
遂結解可請
勘定犯用之
條若無所遣
者任負數可
辨償之

於重科輩者
雖召渡守護
所到田宅妻
子雜具者不
及付渡兼又
同類事縱雖
載白狀無財
物者更非沙
汰之限
又同類事縱雖
載白狀無財
物者更非沙
汰之限
又同類事縱雖
載白狀無財
物者更非沙
汰之限

諸國地頭
令抑留年貢
所當事
右抑留年貢
之由有本所
之訴訟者即
遂結解可請
勘定犯用之
條若無所遣
者任負數可
辨償之
但負數可辨償之
勘定犯用之
條若無所遣
者任負數可
辨償之

但於為少分
者早速可致
沙汰至過今
者三箇年中
可辨濟也猶
皆此旨令難
忘者可被改
所職也



國司領家
成敗不及閑
東御口入事
右國衛莊園
神社佛寺為
本所進止於
沙汰未者今
更不及御口
入若雖有申
旨敢不能叙
用

但於為少分者早速可致沙汰至過今者三箇年中可辨濟也猶皆此旨令難忘者可被改所職也

但於為少分者早速可致沙汰至過今者三箇年中可辨濟也猶皆此旨令難忘者可被改所職也

但於為少分者早速可致沙汰至過今者三箇年中可辨濟也猶皆此旨令難忘者可被改所職也

國司領家成敗不及閑東御口入事

右國衛莊園神社佛寺為本所進止於沙汰未者今更不及御口入若雖有申旨敢不能叙用

事

不及成敗

補不事



100

次不第年所長成發

來

[illegible]

諸國元靈兼神社傳

願奉笑談

高麗第五世文宗大王

飲日今暖不乃寒

張

石のつらさ
 分りこも

上成敗

一在左將家法付外軍

通江府志

正治二年頼朝が薨逝の後、その子頼朝の嫡

不率

正治二年頼朝に薨逝の後、その子頼朝の孫
仁二年、後一十年の將軍より子頼朝の孫

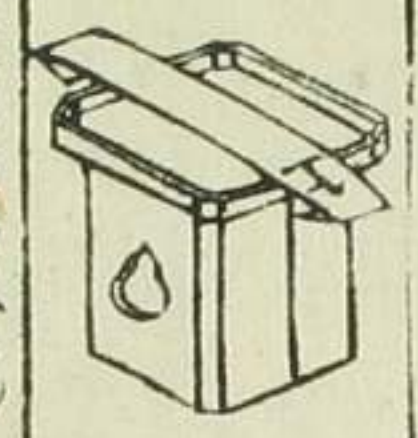
二年將軍宣下十七年の後薨去申す其後頼朝の後や三
位尼藤原頼朝の後見せらるる當時勲功より施行され

位

右或募勲功
之賞或依官
仕之勞并領
之事非無由
緒

而稱先祖之
本領於蒙裁
許者一人縱
雖開喜悅之
眉傍輩定難

成安堵之思
歟盤訃之輩
可被停止



但當時給人
有罪科之時
本主守其次
企訴訟事不
能禁制欽

所願の事今時代より願ふも多し然るも平昔先代の世
備へし事今時代より願ふも多し然るも平昔先代の世

右或募勲功の事或依官
仕之勞并領之事非無由
緒

而稱先祖之
本領於蒙裁
許者一人縱
雖開喜悅之
眉傍輩定難

成安堵之思
歟盤訃之輩
可被停止

但當時給人
有罪科之時
本主守其次
企訴訟事不
能禁制欽

有罪科之時
本主守其次
企訴訟事不
能禁制欽

企訴訟事不
能禁制欽

能禁制欽

次代々御成敗
敗畢後擬申
萬事

依無其理被
棄置之輩歷
歲月之後企
訴訟之條存
知之昔罪科
不輕自今以
後不預代々
御成敗擬致

面々之濫訴
者須以不實
之子細被書
載所帶之證
文



雖帶御下文
不令知行經
年序所領事

次代々御成敗

後擲申私率

先の代々御成敗擬申

工礼さんと擬するもの

依其其理被棄

置之輩歷歲月之後企

訴訟之條存知之昔罪科

不輕自今以後不預代々

御成敗擬致

不實之子細被書載所

帶之證文

先代の御成敗擬申

先代の御成敗擬申

先代の御成敗擬申

一雖帶御下文不令知行

年序所領事

先の代々御成敗擬申

先の代々御成敗擬申

右當知行之
後過二十箇
年者仕右大
將家之例不
論理非不能
改替
而申知行之
由掠給御下
文輩雖帶彼
狀不及叙用

一 謀叛人吏

右式目之趣
兼日難定欽
且任先例且
依時儀可被
行之



一 殺害刃傷
罪科事

此等文と様よりてふとも入れおれぬもせむと年をふ
お願の事なり

右當知行之後過二十箇
年者仕右大將家之例不
論理非不能改替
而申知行之由掠給御下
文輩雖帶彼狀不及叙用

一 謀叛人吏

右式目之趣
兼日難定欽
且任先例且
依時儀可被
行之

一 殺害刃傷罪科事

傷ける罪科事

付父子咎相
互被懸不事

右或依當座
之諍論或依
遊宴之醉狂
不慮之外若
犯殺害者其
身被行死罪
並被處流罪
雖被沒收所
帶其父其子

不相交者互
不可懸之

次又傷科事
同可准之次
或子或孫於
殺害父祖之
敵父祖縱雖
不相知可被
處其罪為散
父祖之憤忽
遂病意之故

付父子咎相互被殺害事

右或依當座
之諍論或依
遊宴之醉狂
不慮之外若
犯殺害者其
身被行死罪
並被處流罪
雖被沒收所
帶其父其子
不相交者互
不可懸之

次又傷科事
同可准之次
或子或孫於
殺害父祖之
敵父祖縱雖
不相知可被
處其罪為散
父祖之憤忽
遂病意之故

次又傷科事
同可准之次
或子或孫於
殺害父祖之
敵父祖縱雖
不相知可被
處其罪為散
父祖之憤忽
遂病意之故

也

次其子若欲

奪人之所職

若為取人之

財寶雖企殺

害其父不知

之由在狀分

明者不可處

緣聖

一依夫罪科

妻女所領被

沒收否事

右於謀叛殺

害並山賊海

賊夜討強盜

等重科者可

懸天咎也但

依當座之口

論若及刃傷

殺害者不可

懸之

之役又

うふふ父祖の怨を殺しつゝ仇

共といふ子もこれ孫中せよ

と教さるるふく月以胸

欲奪人

之罪職を奪

之財寶

雖企殺害其父

不知

之由在狀分

緣聖

一依夫罪科

妻女所領被

沒收否事

右於謀叛殺

害並山賊海

賊夜討強盜

等重科者可

懸天咎也但

依當座之口

論若及刃傷

殺害者不可

懸之

妻女所領被

せらるべしなり 當座のいさゝかむとて、あひます、あひます、人を救へ、又傷害

なるをい毒女とてあそぶけはバ知事かくすものとあり
 なるをい毒女とてあそぶけはバ知事かくすものとあり
 なるをい毒女とてあそぶけはバ知事かくすものとあり

惡は外事
に於て人を罵るは
 辱しむるを外事と云

己卯年正月

不備衆之奇要上

公和堂流石生何益外自題

同
 いたふと
 別て
 世中の
 人情
 の妻は
 多く
 物にも

紀元前二世紀より後、科の古語に押して、（イ）
五穀に押して、（ロ）
五穀に押して、（ハ）
五穀に押して、（ニ）
五穀に押して、（ホ）
五穀に押して、（ヘ）
五穀に押して、（コ）

長江集

[illegible]

乃者

凡同者傷寒要口吐衄同液要之此方非養氣也乃毛西の証也

人面山公正史

又論初事

山夜水石

論兄
書子
卷五

先唐漢文
なるものなり

非義の爲あるを今澤よふの比、所の代の所を没収らるゝ別ふ所也

由皇女之入流罪不從之」となり

國人名

己波丁鄭之筆爲書

石水齋

恥定、病害心、秋、政人科、起
 不、中、仍、お、侍、を、給、被、う、け、收、容、致、す
 不、常、主、可、受、海、寇、お、し、主、徒
 主、主、今、日、捕、致、其、分、又
 又、一、條、重、村、主、政、ま、さ、る、若、必、然、心、憤、り、
 の、害、心、を、露、さ、ん、も、う、た、れ、む、さ、れ、ば、腰、さ、ふ、如、く、主、を、死、す、人、は、お、
 ち、る、其、實、願、望、と、召、し、ら、れ、た、れ、ゆ、え、に、お、う、け、派、さ、る、ま、く、并、筆、の、後、若、し、
 下、儀、の、お、さ、る、に、牢、合、せ、し、む、べ、い、と、あり、
 付、店、元、退、知、事、人、等、の
 代、方、主、殿、
 機、も、お、更、

代皮毛履
織上布疋

存代官と書有殺害意下重
 科物件主の官を主財主会
 一類科
手前ハ重科を犯す代官を主人より捕へ公へ召進さる主人不捕ハ主より
 持代官と書知事主主入庫
 知事犯者即ち難逃主死
 仍ち没収兩限主被代官
 主林也
科わ代官を捕んとせし主人より誤りし主より捕へ公へ召進さる主人不捕ハ主より

科代店を授んとて主人より保しとて
要するもの明白に示す上主人は適切に

可被沒收所
領至被代官
者可被召禁
也

兼又代官或
抑留本所之
年貢或違背
先例之巫法
者雖為代官
之听行主人
可懸其過也

加之代官若
依本所之計
訟若就訴人
之解狀自關
東被召之自
六波羅被催
之時不遂參
決猶令張行
者同又可被
召主人之听
帶但隨事解

可被沒收所
領至被代官
者可被召禁
也

兼又代官或
抑留本所之
年貢或違背
先例之巫法
者雖為代官
之听行主人
可懸其過也

苗在所之年貢或違背先
例之巫法或違背先例之
主人之聽之過也

加之代官若
依本所之計
訟若就訴人
之解狀自關
東被召之自
六波羅被催
之時不遂參
決猶令張行
者同又可被
召主人之听
帶但隨事解

解狀自關東被召之自
六波羅被催之時不遂參
決猶令張行者同又可被
召主人之听帶但隨事解

帶但隨事解

解狀自關東被召之自
六波羅被催之時不遂參
決猶令張行者同又可被
召主人之听帶但隨事解

可有輕重欽

一 謀書罪科

事

右於待者可
被沒收所領
若無所帶者
可被處遠流
也凡下輩者
可被捺火印
於其面也執
筆者又與同
罪次以論人
所帶之證文
為謀書之由
多以稱之披
見之處若為
謀書者元任
先條可有其
科又無文書
之訛謬者仰
謀畧之輩可
被付神社佛

可被捺火印於其面也執筆者又與同罪次以論人所帶之證文為謀書之由多以稱之披見之處若為謀書者元任先條可有其科又無文書之訛謬者仰謀畧之輩可被付神社佛

一 謀書罪科率

謀書之科ハ其ノ罪ノ輕重ニ依テ定ムル事ナリ

右於待者可被沒收所領若無所帶者可被處遠流也凡下輩者可被捺火印於其面也執筆者又與同罪次以論人所帶之證文為謀書之由多以稱之披見之處若為謀書者元任先條可有其科又無文書之訛謬者仰謀畧之輩可被付神社佛也

也

謀書之科ハ其ノ罪ノ輕重ニ依テ定ムル事ナリ

可被捺火印於其面也執筆者又與同罪次以論人所帶之證文為謀書之由多以稱之披見之處若為謀書者元任先條可有其科又無文書之訛謬者仰謀畧之輩可被付神社佛

據分明者宛
給其替於當
給人可返給
本主也是則
於當給人者
有勲功奉公
之故也

次關東御恩
輩之中交京
方之合戰事
罪科殊重仍

即被誅其身
被沒收所帶
畢而依自然
之運道未之
族近年聞食
及者緯已違
期之上最就
寬宥之儀割
所領內可被
沒收五分一
但御家人之

右被京方合戰之軍依所食
及被沒收等事並重之者
從被沒收之軍給
今及被京方合戰之軍
給金有勲功奉公之處

次關東御恩等之
被沒收等事並重之者
從被沒收之軍給
今及被京方合戰之軍
給金有勲功奉公之處

中京京方合戰之軍
被沒收等事並重之者
從被沒收之軍給
今及被京方合戰之軍
給金有勲功奉公之處

外下司莊官
之輩京方之
外縱雖露顯
今更不能改
沙汰之由去
年被議定畢
者不及異儀
次以同沒收
之地稱本領
主訴申事當
知行之人依

有其過沒收
之宛給勲功
之輩畢而彼
時知行者非
分之領主也
任相傳之道
理可返給之
由訴申之類
多有其開既
就彼時知行
普被沒收畢

司庄官に其事務を方々を縦横
悉く其事務を縦横にせしむる云
年被議定畢者不及異儀
度の討ち北條を討ちたれども鎌倉殿とてそのやうな
いふ事があるも其時の中意とてそのやうな事方々に
争ひに及ぶる事のみを言はれし事なり其時其れを
に月終とて遂にその事なり其時其れを言はれし事なり
其方々心をよめし事なり其時其れを言はれし事なり
る上りかづの由を言はれし事なり其時其れを言はれし事なり
より其時其れを言はれし事なり其時其れを言はれし事なり
とある事なり其時其れを言はれし事なり其時其れを言はれし事なり
よむとて其れを言はれし事なり其時其れを言はれし事なり

次以同沒收
地稱本領主
訴申事當
知行之人依
分之領主也
任相傳之道
理可返給之
由訴申之類
多有其開既
就彼時知行
普被沒收畢

何國當時領
主可尋往代
之由緒哉自
今以後可停
止濫望矣

一同時合戰
罪過父子各
別事

右父者雖交
京方其子候
關東子者雖

交京方其父
候關東之輩
賞罰已異罪
科何混

又西國住人
等雖為父雖
為子一人亦
京方者住國
之父子不可
道其外雖不
同道依令同

為内領主之臣候代連綿
自今以後信上濫望矣

兼久の如く後継せられ地を今の勲功あると云ふ宛然なる
を奉の臣主のより相傳ふる道程をすて返す様子
と云ふ事も彼と此の京方小属する外は或て誤らせらる
能ふの証主といふのさればいつて當時の願主とす一
徳者の如くを穿鑿あるきと云ふこれ自今
の如く云ふ様子を信するは誤りなりと云ふ

一同時合戦罪過父子各別
事

右父者雖交京方其子候
關東子者雖交京方其父
候關東之輩賞罰已異罪
科何混
又西國住人等雖為父雖
為子一人亦京方者住國
之父子不可道其外雖不
同道依令同

心也但行程
境遙音信難
通共不知子
細者互難被
處罪科欽

一讓與所領
於女子後依
有不和儀其
親悔返否事
右男女之号
雖異父母之

恩惟同法家
之倫雖有申
言女子則憑
不悔返之文
不可憚不孝
之罪業父母
亦察及敵對
之論不可讓
所領於女子
欽親子義絕
之起也既教

父母俱存後遂多後遂
若不知子細者互難被
又此字番通年更一とあり
又此字番通年更一とあり
又此字番通年更一とあり

一讓與所領
於女子後依
有不和儀其
親悔返否事
右男女之号
雖異父母之

右男女之号
雖異父母之
恩惟同法家
之倫雖有申
言女子則憑
不悔返之文
不可憚不孝
之罪業父母
亦察及敵對
之論不可讓
所領於女子
欽親子義絕
之起也既教

也
法家と、政事の
職を執り法令を
勅へることをいふ

今違犯之基也

女子若有向

背之儀者父

母宜仕進退

之意依之女

子者為全議

狀竭志孝之

節父母者為

施撫育均慈

愛之思者欽



一不論親疎

被養養輩

背本王子孫

事

右馮人之輩

被親愛者如

子息不然者

能法中女子に續る所ありて其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

其の如きものなり其の如きものなり

又如郎從欽
爰彼輩令致
忠勤之時本
主感歎其志
之餘或渡宛
文或與讓狀
之處稱和與
之物對論本
主子孫之條
結構之趣甚
不可然

求媚之時者
 且存子息之
 儀且致郎從
 之禮向背之
 後者或假他
 人之號或成
 敵對之思忌
 先人之恩顧
 違背本主之
 子孫者於得
 讓之所領者

可被付本主
之子孫矣

得讓狀後

其子先于父
母令死去跡
事

右其子雖令
見存至今由

反者有何妨
哉況子孫死
去之後若只

可仕父祖之
意也

妻妾得夫

讓被離別後

領知彼所領

不事

右其妻依有

重科於被弃

指者縱雖有

往日之契狀

難知行前夫

子の親本奉り身後の事を動かさるるに奉動い子孫の世
あるてい人の苗字をいと候名号をいと思ひまはれ
む子孫不付れといふ先主の恩をいふ人教のいふ
あられりい人の恩をいふ人教のいふ

得讓狀後其子先于父

母令死去跡事

右其子雖令見存至今由

反者有何妨哉況子孫死

去之後若只可仕父祖之

意也妻妾得夫讓被離別後

領知彼所領不事右其妻依有

重科於被弃指者縱雖有

往日之契狀難知行前夫

功高も賞新舊旧之所讓

功高も賞新舊旧之所讓

功高も賞新舊旧之所讓

之所領又彼
妻有功無過
賞新弃舊者
所讓之所領
不能悔還

一父母所領
配分之時雖
非義絕不讓
與成人子息
事

人之子今吹
舉之間勵勤
厚之思積勞
功之處或就
繼母之讒言
或依庶子之
鍾愛其子雖
不被義絕忽
漏彼處分佗
條之條非抑
之至也

而願不能悔還
妻妾奸夫の外科ありて棄られぬ往日の契状

一父母所領配分の時雖非
あつとも本妻より後妻よりなる所願の如くあらざり又別居せられざる妻妾より夫は実意を以てする所ありて還らざる

義絶不讓與成人子息事
人の親所願配分する中遠きるものありて成長したる子息を省き譲り與へぬ所の處を以てあるより

存其親以成人子今吹奉
存其親以成人子今吹奉

之間勵勤厚之思積勞功之
之間勵勤厚之思積勞功之

處或就繼母之讒言或依庶子之
處或就繼母之讒言或依庶子之

鍾愛其子雖不被義絕忽漏彼處分
鍾愛其子雖不被義絕忽漏彼處分

佗條之條非抑之至也
佗條之條非抑之至也

仍割今所立
 之嫡子分以
 五分一可究
 給無足之兄
 也但雖為少
 分於計究者
 不論嫡庶直
 依證據抑雖
 為嫡子無指
 奉公又於不
 孝之輩者非

子分以五分一可究給無足之兄也但雖為少分於計究者不論嫡庶直依證據抑雖為嫡子無指奉公又於不孝之輩者非

沙汰之限



一女人養子

事

右如法意者
 雖不許之右
 大將家御時

一女人養子事

右如法意者雖不許之右
 大將家御時

此中次男中未子也嫡子小立其嫡子の名分の五
 分一を割て彼親不保る是の兄に究給べしと有り但し
 嫡子なりとも親の計ひなく見ゆ可ぬ嫡子の
 嫡子なりとも親の計ひなく見ゆ可ぬ嫡子の
 嫡子なりとも親の計ひなく見ゆ可ぬ嫡子の

以来至于當
世無其子之
女人等讓與
所領於養子
事不易之法
不可勝計加
之都鄙之例
先蹤惟多評
議之處尤足
信用故

一讓得夫所

領後家令改
嫁事

右為後家之
輩讓得夫所
領者須拋他
事訪失之後
世之慶背式
目事非無其
外敬而忽忘
貞心令改嫁
者以所得之

其其子と女を信憑無効
願得夫所領事不易之法
不可勝計加之都鄙之例
先蹤惟多評議之處尤足
信用故
法之明法家の見解は、信憑無効の例は、
女子の者我に信憑無効の例は、
代を易くする法也。其の都中田舎の先例は、
今亦評議するに信憑無効の例は、
男子の者とて家を断絶
するは、
外へ歸入んとするとの後定を裁す

一讓得夫所領後家令改

嫁事

右為後家之輩讓得夫所
領者須拋他事訪失之後
世之慶背式目事非無其
外敬而忽忘貞心令改嫁
者以所得之

領地可宛給
亡夫之子息
若又無子息
者可有別御
計

關東御家
人以月卿雲
客為聶君依
讓所領公事
足減少事

右於所領者
讓彼女子雖
令各別至公
事者隨其分
限可被省宛
也

親父存日あふざんよふたふ 縱たゞ 成優恕之儀なりやうじのぎ 雖不宛課なほはなはたせ 去後きのち者尤可なり 令催勤あせむ

皇子具衣有別御針

御書
 御書
 御書

貞女^{まこと}あまふ見^みるすてふ式^{しき}同^{どう}ふ背^せきたるる改^か嫁^けるとも而^{しか}
 照^てりりさせやらず亡^なまの子^こふたぬひ子^こぢく六^む別^べふ上の所^{ところ}針^{はり}
 あるゝといふ時^{とき}眞^{まこと}ふより兼^{かね}て六^む定^{さだ}むるなり是^{これ}ハ亡^なまの迷^{まよ}
 所^{ところ}沙^されぬあまふ下^{した}成^{なり}と善^よむ花^{はな}雨^{あめ}ふあ附^つくとあふるるべし

一閣東游家人隨雲客

為尊君依禮所成事宣滅

中事

其の上人と云ふは、
 公の軍役と勤するを
 算ふこと、
 其の足るやと、
 減かざるやと、
 算ふての
 定むるを、
 裁す。

有於所成者幾微矣

然垂古隨其公侯伯者

病
所願の女子に據りて女子の心を病の害あるをれが軍役を
勤めざるべきやうなれど所願ふ所を役をせざる

その分派は、しやうはくは、しやうはくの勤めをすべく有^あるものと
別^{わか}て仕奉^{つかまつ}りの役をすうた^{やうざう}らば^{やうざう}なりと宛^{あて}べーとん

日從咸優好必逢不窮保

逝之後孝子令儀勤いんげんと
いふさる

市どのに^いぬる^る親^{おや}を^もた^は生^なの^の附^つに^に公^{こう}取^とと^と己^{おのれ}より^{より}毎^{まい}へ^へ優^{よく}怒^どを^を
 て^を究^{きう}保^ほざ^らう^うも^も死^し波^は中^{ちゆう}に^に信^{しん}便^{べん}く^く勤^{きん}め^めさ^さま^まべ^べと^とな^なり

九雖為關東
祇候之女房
敢勿泥殿中
平均之公事
此上猶令難
涉者不可知
行所領

一讓所領於
子息給安堵
御下文之後
悔還其領讓
與他子息事
右可任父母
之意之由具
以載先條畢
仍就先判之
讓雖給安堵
御下文其親

永代徳所と稱道して
公へ美生さす。金さくとも

風聲

祇候之仕度教勿泥致申奉
均之公事此之從令難返
不可知行聽領

中平地であつても、土は硬く、泥濘が多く、敷土を要する。土質は、上部は砂質、下部は粘土質と成り

一、六六 漢新頤教の息後其夜
 中、中 文令後通達其心漢
 與、人の子に 其年、其年 後日遠くを二安流の所

新物と申すは、平邊伯鎮地と云ふ迄、今
一人の子息ふたりの習ふと云ふの定ぬなり

右何任父題之卷首題詞

悔還之於讓
他子息者任
後判之讓可
有御成敗

一未處分跡
事

右且隨奉公
之淺深且
器量之堪否
各任時宜可
被分宛

構虛言致
誣訴事

右和面巧言
掠君損人之
屬文籍所載
其罪甚重為
世為人不可
不誠為望所
領企誣訴者
以誣者之所
領可宛給他

還之於讓

他子息者任

後判之讓可

有御成敗

一未處分跡

事

右且隨奉公

之淺深且

器量之堪否

各任時宜可

被分宛

構虛言致

誣訴事

右和面巧言

掠君損人之

屬文籍所載

其罪甚重為

世為人不可

不誠為望所

領企誣訴者

人無所帶者
可處遠流又
爲塞官途構
讒言者永不
可召仕彼謬
人

閣本奉行
人付別人企
訴訟事

右閣本奉行
人更付別人

内々企訴訟
之間參差之
沙汰不慮而
出来狀仍於
訴人者暫可
被抑裁許至
執申人者可
有御禁制奉
行人若令緩
怠空經二十
箇日者於廷

言以人君と様々一人を冤み陷れ若し其の屬古來書
藉小載て云々罪科有り世におも人のおも嚴密戒め
其の重きと云ふされば其の重きより人を修め其の
終其の所願を却て修せられる者も修めべきを修
小配流べし又仕官ふき人の之より世の妨せぬを修め
仕官の道と塞ぎざるを修者を永く仕官せざるを
一閣本奉行付別人企訴訟

奉
右閣本奉行付別人企訴訟

右閣本奉行付別人企訴訟

右閣本奉行付別人企訴訟

右閣本奉行付別人企訴訟

右閣本奉行付別人企訴訟

右閣本奉行付別人企訴訟

中可申之

遂問註輩

不相待御成

敗執進權門

書狀事

右預裁許者

悅強縁之力

被弄置者愁

權門之威爰

得理之方人

者頗稱扶持

之芳恩無理

之方人者竊

猜憲法之裁

斷黷政道職

而斯由自今

以後儘可停

止也或付奉

行人或於庭

中可令申之

遂問註輩不相待御成執

進權門書狀事

右預裁許者悅強縁之力

被弄置者愁權門之威爰

得理之方人者頗稱扶持

之芳恩無理之方人者竊

猜憲法之裁斷黷政道職

而斯由自今以後儘可停

止也或付奉行人或於庭

中可令申之

遂問註輩不相待御成執

進權門書狀事

右預裁許者悅強縁之力

被弄置者愁權門之威爰

得理之方人者頗稱扶持

之芳恩無理之方人者竊

猜憲法之裁斷黷政道職

而斯由自今以後儘可停

止也或付奉行人或於庭

中可令申之

依無道理

不蒙裁許之

輩為奉行人

偏頗之由訴

申事

右依無其理

不關裁許之

輩為奉行人

偏頗之由構

申之條太以

盤吹也自今

以後構出不

實企盤訴者

可被收公所

領三分一無

所帶者可被

追却若又奉

行人有其誤

者永不可被

召仕

一隱置盜賊

惡黨於所領

狀もとり向後たるは停止あり所領のふりもかゝる奉り
人より内實よりして八極中へ警備をせしむるなり

一依無道理を蒙裁許を蒙

の輩は偏頗を重訴中奉

右依無道理を蒙裁許を

輩為奉行人偏頗を重訴

之條太以盤吹也自今

以後構出不實企盤訴者

可被收公所領三分一無

所帶者可被追却若又奉

行人有其誤者永不可被

召仕

一隱置盜賊

惡黨於所領

内事

右件輩雖有風聞依不露顯不能斷罪不加炳誠而國人等差申之所召上之時者其國無為也在國之時者其國狼藉也云云

内事

右件輩雖有風聞依不露顯不能斷罪不加炳誠而國人等差申之所召上之時者其國無為也在國之時者其國狼藉也云云

仍於緣邊之凶賊者付證跡可召禁

又地頭等至惡置賊徒者可為同罪也

先就嫌疑之趣召置地頭

於鎌倉彼國不落居之間者不可給身

又地頭等至惡置賊徒者可為同罪也

先就嫌疑之趣召置地頭

又地頭等至惡置賊徒者可為同罪也

於鎌倉彼國不落居之間者不可給身

又地頭等至惡置賊徒者可為同罪也

先就嫌疑之趣召置地頭

又地頭等至惡置賊徒者可為同罪也

暇

次被停止守

護使入部所

々事同惡黨

等出來之時

者不日可召

渡守護所也

若於拘惜者

且令入部守

護使且可被

改補地頭代

也若又不改

代官者被沒

收地頭職可

被人守護使



強竊二盜

罪科事放

火人事

右既有斷罪

又此江本職後を渡守に置かれしに、これより先の凡
少わく、人々の嫌疑を以て、謀合の事、密に察知せし
極るまで、國へ知らせず、密に察知せし、
次は、停吉

護使、部所、事、同、惡、黨、

等、來、る、時、不、日、可、召、

渡、守、護、所、也、

若、於、拘、惜、者、

且、令、入、部、守、

護、使、且、可、被、

改、補、地、頭、代、

也、若、又、不、改、

代、官、者、被、沒、

收、地、頭、職、可、

被、人、守、護、使、

強、竊、二、盜、

罪、科、事、放、

火、人、事、

右既有斷罪

之先例何及
猶豫之新義
哉次放火人
事准劫盜賊
罪令禁遏

一密懷他人
妻罪科事

右不論強姦
和姦懷抱人
妻之輩被召
所領半分可

被罷出仕無
所帶者可處
遠流也女所
領同可被召
之無所領者
又可被配流
之也

次於道踏辻
捕女事於御
家人者百箇
日之間可止

家之新條次放火人可准
劫盜賊罪令禁遏

一密懷他人妻罪科事

右不論強姦和姦懷抱人妻之輩被召所領半分可

被罷出仕無所帶者可處遠流也女所領同可被召之無所領者又可被配流之也

次於道踏辻捕女事於御家人者百箇日之間可止

仕

仕

出仕

至郎從以下

者任右大將

家御時之例

可剃除片方

之鬢髮也

但於法師罪

科者當其時

可被斟酌

一雖給度々

科事

右就訴狀遺

召文事及三

箇度不參決

者訴人有理

者直可被裁

許訴人無理

者又可給他

人也

但至所從馬

牛並雜物等

利除片方之鬢髮也

の六百日つゝもあつて下城のもの

呼罪科を處す時不罰科也

法師の利除片方鬢髮を其例に照し科せらるゝと

一雖給度々受文奉科

奉

右就訴狀遺召文事及三箇度不參決

可被裁許訴人有理者直可被裁

許訴人無理者又可給他

人也

但至所從馬牛并雜物等

考任有裁許此返可付

寺社修理也

但至所從馬牛并雜物等

數のあつて水分のわざよりさう返し
 往の便復料不寄附せらるゝと云

山林田園を愛する人
の境なき心は海に遡る

右我越往者之挽攝新儀

張氏之孫必年俊

文書翰
往
賓
式
年
三

多矣

校校方得免之書

謀為成敗之書也

煥くわん 者の遺蹟を紙に刻み、思案をめぐり、自筆の文を採りて、又上から死に古の書物などを採りて、繪とるを

又自己の故とありても万一傍て利あり負ふ事なし

[illegible]

如小字上と云ふと云ふ

拾遺記

此相計賊境或命亡分良

劉家紙人真長面皮寸命

[illegible]

人之力

訴人領地之
内可被付論
人之方也

一關東御家
人申京都望
補傍官所領
上司事

右右大將家
御時一向被
停止畢而近
年以降企自

由之望非童
背禁制令覃
喧嘩欲自今
以後於我盤
望之輩者可
被召所領也

一惣地頭押
妨所領内各
主職事

右給惣領之
人稱所領内

るべき事ありとて論
人のより分るべきなり

一關東御家人申京都望

補傍官所領上司事

右右大將家御時一向被

停止畢而近年猶企自

由之望非童背禁制令覃

喧嘩欲自今以後於我盤

望之輩者可被召所領也

一惣地頭押妨所領内各

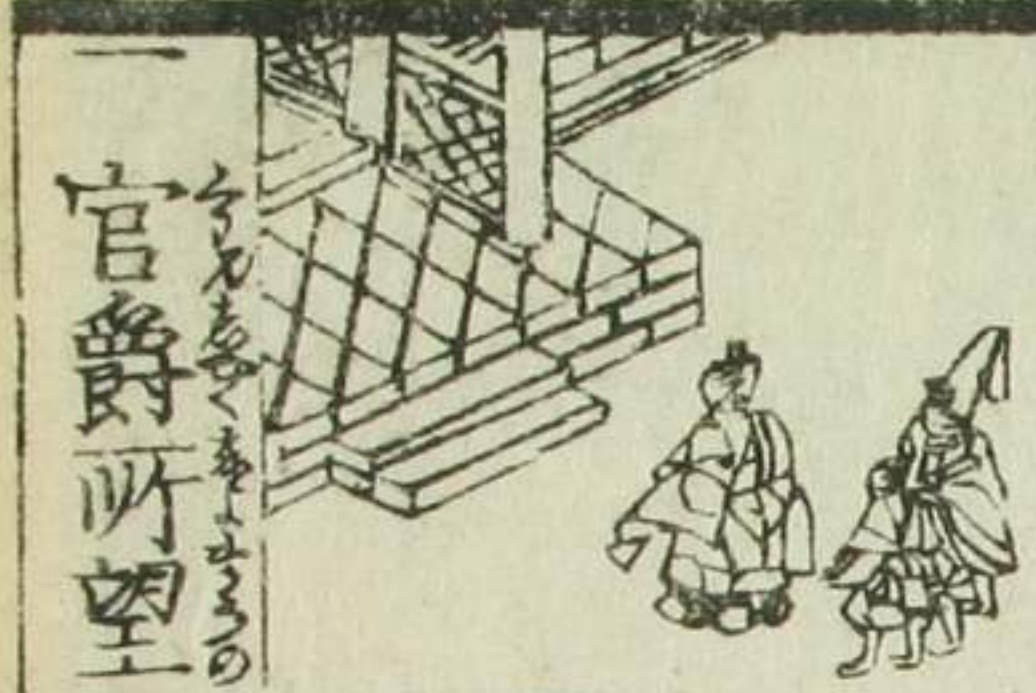
主職事

右給惣領之人稱所領内

後奉

掠領各別村
 事所行之企
 難道罪科爰
 給別御下文
 雖為名主職
 惣地頭若伺
 庭弱之隙有
 限沙汰之外
 巧非法致監
 妨者可給別
 納御下文於

名主也名主
 又寄事於左
 右不顧先例
 違背地頭者
 可被改名主
 職也



右給惣匠人構所願内保任
 各々の村事所為金程過罷
 付差給別御下文雖為名主
 務惣地頭若伺庭弱之隙有
 限沙汰之外巧非法致監
 妨者可給別御下文於

主之各五又寄事於左
 不顧先例違背地頭者
 改名主職也

押するの諸村を以て
 名主職に任ぜしむる
 可ハ下文ありて
 主之各五又寄事於左
 不顧先例違背地頭者
 改名主職也

官爵所望
 官爵所望集甲清園東所

輩申請関東
御一行事

右被召成功
之時被注申
所望人者既
是公平也仍
非沙汰之限
為昇進中舉
狀事不論貴
賤一向可停
止之



但申受領檢
非違使之輩
於為理運者
雖非御舉狀
只有御免之
由可被仰下
欽

一行事

官位階級爵位は階級一行より一階級を越え
たことより爵位の日中より今より下流の者より

右被召成功之時被注申

所望人者既

是公平也仍

非沙汰之限

為昇進中舉

狀事不論貴

賤一向可停

止之

但申受領檢

非違使之輩

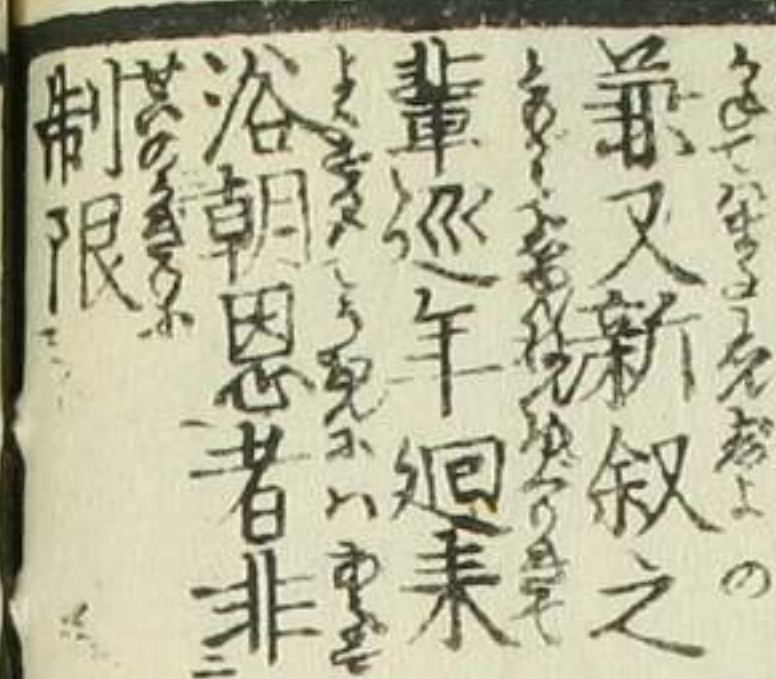
於為理運者

雖非御舉狀

只有御免之

由可被仰下

欽



一 鎌倉中僧
徒次譯官位
事

右依綱位（右の位に依る） 薦次之故猥（さしつかへなく） 求自由之昇（あがりを求め） 進彌添僧綱（僧綱をますます増す） 之負數雖為（その負の數は） 宿老有智之（宿老に智恵あり） 高僧被裁（高僧に裁き） 少年無才之後（少年に才なしのち）

右依從位孔獨次之於櫟
日也升進添添從之真
數雖為宿者智高仿被
越少年受之後世即此

輩即是且傾
衣鉢之資且
亦經教之儀
者也

自今以後不
蒙允許昇進
之輩為寺社
供僧者可被
停廢彼職也
雖為和歸依
之僧同以可
被停止之



此外禪侶者
偏仰顧盼之
人宜有諷諫
之誠

傾衣鉢之資且亦經教之後
考也
十九日また九十日禁裏より七佛學修をまゐるを要す

目今以後蒙允
許野を乞ひまゐるも和僧侶
被停止之儀也

雖為和僧侶
供僧者可被
停廢彼職也

雖為和僧侶
供僧者可被
停廢彼職也

雖為和僧侶
供僧者可被
停廢彼職也

雖為和僧侶
供僧者可被
停廢彼職也

諷諫の誠を人々練云とある中より編み入れ

一 奴婢雜人
事

右任右大將
家御時之例
無其沙汰過
十箇年者不
論理非不及
改沙汰

次奴婢所生
之男女事如
法意者雖有

子細任同御
時之例男者
付父女者可
付母也



一 百姓逃散
時稱逃散令
損亡事

一 奴婢雜人
事
奴婢雜人とは男之婢ハ
女之雜人ハた年免れ云

右任右大將
家御時之例
無其沙汰過
十箇年者不
論理非不及
改沙汰

次奴婢所生
之男女事如
法意者雖有

子細任同御
時之例男者
付父女者可
付母也

一 百姓逃散
時稱逃散令
損亡事

一 百姓逃散
時稱逃散令
損亡事

一 百姓逃散
時稱逃散令
損亡事

有法國恒氏逃脫時全願
主未捕此段抑為害矣奪
取資財財不行之全甚為仁
政乃被台決之者又有善員
所為未滿志可致其懷不
然至平可被紅返換約他
於七留官任任民之安也

右構無實掠

一、いふ 領主のしやく 課役の平へい 凡ふつ 小こ 苦く 七しち 逃にげ する者もの 逃にげ 隠かく 逃にげ
 なる者もの を収おさ つかふ者もの 志い 断たつ 言い 妻子さいし とすること ためため 資き 材ざい と金かね 買か
 はん者もの ち 換か 亡な せしこと びひ なる者もの かきうかきう の不ふ 行ぎやう 仁に 以もつ の背へ くる
 更また 情なさけ をささ すること 其その 逃にげ 民たみ と漏ろう 金かね 入いれ 同どう 決けつ すること に不ふ 意ぎ
 の年とし 貢きやう ぎ 未も 進しん わること 六む 毛もう 使し いたこと 存ぞん せんこと すること 六む 換か 物もの を
 返かへ さんこと ぶこと すること 換か 物もの の妻さい 子し 資き 材ざい をのたこと ぶこと すること 其その 民たみ の
 其その のこと 亡な びひ 隔へき 苗めう うこと まこと 化くわ 更また
 移うつ 去さ ること 者もの まこと せこと すること ぶこと すること なり

一種當知行操給他人順

貧乏所生也

[illegible]

右攝政安撫使李武臣和

領事式目所
推難脫罪科
仍於押領物
者早可令
返至所領者
可被沒收也
無所領者可
被處遠流
次以當知行
所領無指次
申給安堵御

推難脫罪科仍於押領物
事是紅玉和順可被沒
收安堵所領者可被處遠流
實地も安堵を構へて代順を押領せし科ふ事地と死
五さうのいさゝかさへお願ひも上らるる
次以當知行所領無指次
後安堵所領者
次給安堵御

下文事若以
其次始致私
曲故自今以
後可被停止
傍輩罪過
未斷以前競
望彼所帶事
右積勞効之
輩企所望者
常習也而有
所犯之由令

被停止
傍輩罪過未斷以前
競望彼所帶事
右積勞効之輩企所望者
常習也而有
所犯之由令

風聞之時罪
狀未定之處
爲望件所領
欲申沈其人
之條所爲之
旨敢非正義
就彼申狀有
其沙汰者虎
口之謔言蜂
起不可絕歟
假使雖爲理

運之訴訟不
被叙用兼口
之競望



一罪過之由
披露時不被
糾決改替所
職事
右無糾決之

風聞之時罪狀未定之處
爲望件所領欲申沈其人
之條所爲之旨敢非正義
就彼申狀有其沙汰者虎
口之謔言蜂起不可絕歟
假使雖爲理

望
糾決不被叙用兼口之競望
運之訴訟不被叙用兼口之競望
假使雖爲理

一罪過之由披露時不被
糾決改替所職事
右無糾決之

右無糾決之

儀有御成敗
者不論凡否
定貽鬱憤歎
者早究淵底
可被禁斷

所領得替
時前司新司
沙汰事

右於所當年
司者可為新
司之成敗至

私物雜具並
所從馬牛等
者新司不及
抑留況令與
耻辱於前司
者可被別
過怠也



之儀在官定後相續者事
究淵底可被禁斷

一所領得替時前司新司沙
汰事

右於所當年
司者可為新
司之成敗至

私物雜具並
所從馬牛等
者新司不及
抑留況令與
耻辱於前司
者可被別
過怠也

但依室科站沒收志能沙

但依重科被
沒收者非沙
汰限

以不知行
所領文書寄
附他人事

付以名主職
不觸本所
寄進權門
事

右自今以後
於寄附之輩
者可被追却
其身也至請
取之人者可
被付寺社修
理
次以名主職
不令知本所
寄附權門事
自然在之

汰限

司のそれゆへ

以不知行

所領文書寄附
他人事

付以名主職不觸本所
寄進權門事
右自今以後於寄附之輩
者可被追却其身也至請
取之人者可被付寺社修
理

次以名主職不令知本所
寄附權門事
自然在之

如然之族者

召名主職可

被付地頭無

地頭之所者

可被付本所

一賣買所領

事

右以相傳之

私領要用之

時令沽去者

定法也而或

募勲功或依

勸白預別御

恩之輩悉令

賣買之條所

行之旨非無

其科自今以

後皆可被停

止也若又背

制符令沽却

者云賣人云

買人共以可

之聖之被付本所

名主職を以て之を被付す所也其の地頭無き者も亦之に被付すべし

一賣買所領事

右相傳之私領要用所

令沽却者定法也而或募

勲功或依勸白式依勸白預別御

恩之輩悉令賣買之條

行之旨非無其科自今以後

皆可被停止也若又背制符令沽却

者云賣人云買人共以可

賣買之條所行之旨非無其科自今以後

皆可被停止也若又背制符令沽却者云賣人云買人共以可

賣買之條所行之旨非無其科自今以後皆可被停止也若又背制符令沽却者云賣人云買人共以可

被處罪科

兩方證文

理非顯然時

擬遂對決事

右彼此證文

理非懸隔之

時雖不遂對

決直可有成

敗狀

狼藉時不

知子細出向

其庭軍事

右於同意與

力之科者不

及子細至其

輕重者兼難

定式條尤可

依時宜款為

聞實不宗知

子細出向其

庭者不及罪

科

あつた責まも責まも
曲つた責まも責まも

一西方徒人理難時擬

遂對決事

右彼此證文非懸隔之時推

不遂對決時可有成敗狀

狼藉時不知子細出向

庭軍事

右於同意與力之科者不

及子細至其輕重者兼難

定式條尤可依時宜款為

聞實不宗知子細出向其

庭者不及罪科

科

帶問狀御
教書致狼藉

一 帶問狀御教書致狼藉

右就訴狀被
下問狀者定

右就訴狀被下問狀者定

例也而以問

右就訴狀被下問狀者定

狀致狼藉事

右就訴狀被下問狀者定

奸盜之企難

右就訴狀被下問狀者定

道罪科所申

右就訴狀被下問狀者定

為顯然之僻

右就訴狀被下問狀者定

事者給問狀

右就訴狀被下問狀者定

事一切可被
停止



起請

起請

起請の文字ハ系後漢書

起請の文字ハ系後漢書
年六月廿八日
起請又本抄文輝の系中書五の山亭起請を
不スこれと既小
傳文をれするもの
併并徳天
もた
不立
も
今
の
起
請
の
か
ら

御評定間理
非決斷事

右愚暗之身
依見之不見
及若言越相
違事更非心
之所曲

其外或為人
之方人乍知

道理之上自稱
申無理之由
又為非其事
弓有證跡為
不顯人之短
乍令知子細
付善惡不申
之者意與事
相違後日之
訛謬出來欺
凡評定之間

久し藤倉時代よりしての事のあらうとて、其内評定數十
人此武家も定め相承に曲を存せず、其内を連署する評定

御評定間理非決斷事

自ら其の評定するの事と、或は其の評定する事と、天下の政事を
評定する由多小評定字と加ふる事、其評定ハ、此の事と

右愚暗之身依見之不見

若言越相違事更非心之所曲

其外或為人乍知

道理之上自稱申無理之由

又為非其事

弓有證跡為不顯人之短

乍令知子細

付善惡不申之者意與事相違後日

之訛謬出來欺

凡評定之間

其外或為人乍知

御成敗事切
之條々縦雖
不違道理一



車切の事の定切さだめさるる事こと上うへの五ヶ条ごがじょうなりかく字じなり
 なる上うへの道みち行ゆきふ遠とほいさるも一人ひとりの憲法けんぽうふあらず非義ひぎの改あらため

同之憲法也
誤雖被行非
扱一同之越
度也

自今以後相
向訴人并其
縁者自身者
雖存理傍輩
之中以其人
之說致違亂
之由有其聞

ありとも十人一人の
の誠意をとり
自今以後相向ひて
毎其縁者自身を改むる理
傍若無人之中其人之説教遠
私を重むるを愛さざるは
殆ど貽禍の爲なり
附つへの縁えん自みづかりり分ぶんに存ぞんずれば附よの伴ばん定てい流りゅうその人ひとが遠とほれ
といふはたゞかゝる縁えんある者ものに因よりて

者已非一味
之義殆貽諸
人之嘲者欤

兼又依無道
理評定之庭
被弃置之輩
越訴之時評
定衆之中被
書與一行者
自餘之計皆
無道之由獨

似被存之欤
者條々子細
如此

若雖為一事
存曲折令違
梵天帝釋四
大天王惣日
本國中六十
餘州大小神
祇殊伊豆箱
根兩所推現

兼又依無道
理評定之庭被弃置之輩

此獨似被存之欤
者條々子細
如此

折令違
梵天帝釋
大天王惣
日本國中
六十餘州
大小神祇
殊伊豆箱
根兩所推
現

朝臣康俊

出
張
紅
絲

教子善明金

原朝臣家長

加賀守 室松康俊

前駿河守平

朝臣義村

沙弥行西

撰津守中原

前此所書

朝臣師食

武藏守平朝

新駿河平松村

臣奉時

たがひのきりかへ

揚州守常報學真

臣時房

武藏守事物邊春時

相摸守平初時房

沙汰ハ叙成要覧に比小姑て藩娶レテ後の称謂也云々
叙ト息姪と爲絹ハ云々世人世縁の情ヲ身ニ着キ以テ群レ

上 塩巻抄にあり本文の門人の作文なり
 藤原連の田泰綱の後五位下正從五位上
 行基の二階堂氏なり文雄重の次此藤原俊善信の子息
 行西も二階堂氏なり村家長の中條長村の浦子あり
 朝臣の姓の下に書きあり戸といふ藤原と云ふ中來るとの姓に
 つきたる稱なり五位下の入るりと云ふ事なりけり
 下 下にかの宛名なり文書されど如くの下といふ事あり

千七百八

家傳 清涼香

はかしの年う 大袋入 價貳匁
つろをあらじ 小袋入 日 壹匁

此清涼香は世にたゞの香にあらざりて、
はかしの年うにあらじ。○あせをよめ、又○月にかけると、
○後のすきと、なる。○何れをよめ、別して、
一は、中極大、毎日、水は、つる。の、後、に、用ひ、
あせをよめ、の、つる。の、つる。の、つる。の、つる。の、
つる。の、つる。の、つる。の、つる。の、つる。の、

東京 馬喰町二丁目角 吉田屋文藏
書林 賣弘所 同所四丁目 吉田屋文三郎

